
復活魔王と新勇者

分福茶釜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復活魔王と新勇者

【Nコード】

N5970Z

【作者名】

分福茶釜

【あらすじ】

勇者と魔王との大きな争いから数年後、世界はつかの間の平穏に包まれていた。魔王を倒し、伝説の勇者と崇められる父と、勇者とともに魔王を倒した魔法使いの母を両親に持つアレイは周囲の期待を重荷に感じつつも幸せに暮らしていた。……しかし、彼が13歳の時、再び世界を乱し始めた魔物達によって家族を失ったアレイは、両親の復讐を胸に誓って旅に出る……。のだが旅の途中、大昔に封じられていたらしい魔王の封印を解いてしまう。

魔物に復讐を誓う少年勇者と、はるか昔に封印された魔王との奇

妙な冒険が今始まる。

第1話 魔王と勇者（前書き）

『ヤマアラシのジレンマ』

二匹のヤマアラシは凍えた体を互いに温めようと寄り添う。しかし体についた針が互いの体に突き刺さりたまらず間をとる。しかし寒くてまた近づく。針が刺さる。離れる……………

これを繰り返すうちに針が刺さらないで互いに温め合える間合いがはかれるというわけだ。……………まあ、大抵の場合その間合いをはかる前に互いに傷ついて死に絶えることが多いが。

第1話 魔王と勇者

「おかーさん、あのね……僕ね、大きくなったらお医者さんになるー！！」

小さな子供。まだ世界のことなんて何にも知らない無邪気な笑顔で将来の夢を語る。

「まあ、ならお母さんが病気になっても治してくれるのね？」

「うん！！僕、おかーさんもおとーさんも村の人もみーんな絶対に助けるお医者さんになるっ！！」

「まあ、頼もしいわ……………アレイ」

これは……一人の少年のはるか昔の記憶。

ドゴオオオオツ！！

巨大な爆発音で俺は目を覚ました。まだ頭が完全に状況を把握する前に、グイツと首根っこをつかまれ勢いよく後ろに引っ張られる。と直後、俺のいた場所に鉄でできた棍棒が振り下ろされた。

「ふむ、この状況で寝ぼけていられるとは貴様はやはり肝が据わっているな」

俺を引っ張ったのは、一点の穢れもない漆黒の髪をなびかせる一人の女。飾り下のない黒いタイトドレスに、絹でできているという黒のロンググローブや黒いブーツで身を包んだ黒ずくめの格好だ。唯一、黒でない物といえば頭の鈍く光り輝く鉛色のティアラだろうか。

「ほら、何をしている勇者。さっさとあのデカブツを倒せ。死ぬぞ」

彼女の指さす方を見れば巨大な魔物が大きな鉄の棍棒を振り上げてこちらに襲いかかってくるところであった。

「あぶねっ!？」

間一髪振り下ろされた棍棒をかわすと俺は魔法の詠唱を始める。詠唱で少し時間はかかるがこういう相手には一発でかいのをかまさないで長期戦になる。長期戦になるのは面倒だ。

「我に宿りし聖なる炎よ、今我に力を与えよ　炎爆!！」

詠唱が終わると同時に、火炎の渦が現れ巨大な魔物は火に包まれる。魔物はしばらく悶え苦しんでいたが、やがて力なく倒れるとそのまま燃え尽きた。図体はでかったけど大したことはない、所謂雑魚という奴だろう。

「うむ。やればできるではないか勇者よ」

「起こしてくれてもよかったと思うんだよね……」

「なぜ私がお前を起こさねばならない。そんなことでは魔王は倒せ

んぞ」

「魔王のお前に言われたくないけどな」

そう俺の横に立って燃え尽きた魔物の亡骸を見下ろしているのは紛れもなく魔王だ。ただ……今の魔王ではない。話せば長くなるが、俺のちょっとしたヘマで大昔に封印されたと言う魔王を蘇らせてしまったのだ。ホントに……世界のみんなごめん。責任を持って俺がしっかり見張るから……どうか俺を恨まないでくれ。

「これは……きつとトルルだな、大方住んでいた森を人に追われてふらふらとしているところを私達と遭遇したのだろう。人がいると知って怒りに我を忘れたようだ」

「なあ……何でこう、魔物と人間ってのは上手くいかないんだろうな。魔王を倒して少しは平和になったかと思えば、今度は人が魔物の住処を荒らすし……それに怒った魔物が人を襲ったりさ……」

「ん、貴様はヤマアラシのジレンマという言葉は知っているか？」

聞いたことがある。たがいに身を寄せ合おうとするが自らの体の針で互いの傷をつけあってしまうということだった筈だ。

「人と魔物の関係はそれと似通っているのかもしれないな。人も魔物もどちらも平和を望んでいる。しかし両者の考えは食い違っている。そしてどちらも自分の種族以外を見下す傾向にある。これでは手を取り合って……なんてやっている場合ではないな」

「なあ、気になってたんだけど……魔物も平和を望んでいるのか？」

「それはそうだろう。誰も争いたいなどとは思ってはいない。しかし魔物は人間を下等な種と考える。平和に暮らすためには暮らしを脅かすかもしれない野蛮な人間を排除しようと考えてるのは、まあ人間には納得いかないかもしれんが必然的な流れだ」

「そうか……人間もそう考えてるのかもな」

人間が魔物狩りを始めた理由もそういったものかもしれない。俺は自分の倒した……いや、殺した魔物を見つめる。

「まあ、綺麗事を言っても純粹に人を殺すことが好きな魔物もいるがな」

「なんだそりゃ……」

せつかくの雰囲気がなんだかしまりのない空気になってしまった。俺は今の魔王の言葉で一瞬、心の奥底に浮かんだ人間も純粹に魔物を殺すのが楽しいだけなんじゃないか……という疑問をかき消して彼女に口を開く。

「行こう魔王。この先に魔物に襲われた村がある」

「……村か。しばらくぶりだが。襲われた村など危ないだけではないか？」

少しだけ顔をしかめる魔王。どうやらわざわざ危険な場所には行きたくないようだ。だったらついてこなければいい話なのだが、なぜかこの魔王は俺についてくる。……なんでも封印を解いてくれた礼にひよっこ勇者の俺を見守ってくれるのだとか……俺は、はっき

り言って魔物が大つきらいだ。だからさっきのトロルも人のせいで住処を追われたのだとしても特に何も感じないし、この魔王も本当のところはすぐにでも斬り倒したいのだが今の俺にはまだ魔王を倒せる力はないし、一応命の恩人的な立場でもある彼女を殺すの**も**はばかられる。

「いいんだよ、俺は魔物に復讐がしたいんだから」

「ん、貴様の好きにしろ」

魔王である彼女の前で魔物に復讐すると言ったのは自分でもどうかと思ったがもう何度かこのセリフは彼女の前で使っているし、当の彼女が気にする様子もないのだから良いのだろう。

第1話 魔王と勇者（後書き）

どうも、お読みいただきありがとうございます。
稚拙な文章ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

第2話 勇者の夢（前書き）

『夢』

寝ている間に見るものの方ではないと言っておく。

夢は誰も見erるものだろう。否定する者もいるが無意識に見ているので気が付いていないのかもしれない。簡単にいえば夢とは広い意味での欲求である。欲求はその者自信がどうできるものではない。人が欲求を捨てない限り人は夢を見続け、そして人は永遠に欲求を捨てることはできない。

第2話 勇者の夢

今から8年ほど前……

「さあ、アレイちゃん。今日も魔法教えるわね？」

俺の母親、名前はエリーヌ。6年前の魔王討伐の際に勇者とともに魔王を打倒しそのまま勇者と恋に落ちた大魔法使い。彼女の魔法の力に対抗できるものは世界でもいるかいらないか分からない。

「うん。おかーさん……今日は何をするの？」

当時5歳の俺は両親から優れた魔法と剣術を教えられ、5歳にしてはかなりの力を持っていた。それゆえ周囲の期待も大きかったが

……

「それじゃー……今日はアレイちゃんのために治療魔法を教えましょうー！」

「えっ！！ホントに！？やったあ！！」

その頃の俺は勇者でも魔法使いでも無く、医者になることが夢だった。どうしてかと言われればよくわからないが、病人やけが人を治してしまう……そんなお医者さんとやらにあこがれていたのだろう。しかし、周囲はせっかくの俺の剣術と魔法の才能を放っておけなかった。魔王を倒したばかりでまだまだ人間の暮らしも安心しない中、今度は人間達がいざこざを起こし始めたのだ。もはや伝説となっている両親の息子　しかも両親の優秀さを受け継いでいるを利用すれば世界の盟主的な存在になれると俺の祖国は考え

た。また、魔王を失って統制の利がなくなつた魔物から自分達の暮らしを守ってほしいという村人達の期待もあつて、俺は国からも村人達からも次代の勇者になることを期待されていた。

俺の夢を知っていた両親は気にしなくていいと言つてくれていたが、頻繁にやってきては俺を積極的に勇者にさせるべきだと口うるさく言う宮廷の役人には手を焼いていたようである。

「そうねえ……普通、治癒魔法つて言えば水魔法が一番基本なんだけど、難しいのを先に覚えれば簡単なのも覚えられるから混合魔法での治癒を教えるわね？」

「うんっ！！」

両親は俺を勇者に育てるためではなく、将来どのようなことが起こつても対応できるように、魔法や剣術を教えてくれていた。特に母は、俺の夢のためには欠かせない治癒魔法を積極的に教えてくれていたのだ。

「うん……俺はそつち方面は全然ダメだからなあ……」

医療系に関する才能を持ち合わせていなかった俺の父親、ジャードは、いつも俺と母が行う訓練を羨ましそうに見ていた。自分も才能があればアレイに存分に教えてやれたのに……エリー又ばかりずるいぞ。……それが彼の口癖だった。しかし父から教えられた、状況の把握の仕方や、緊急時での判断力などは治癒魔法と同じくらい俺の夢には重要なものであつたのだ。

「うふふジャード、もうあなたは用済みね。これからアレイちゃん
は私の訓練だけで十分みたいだわ」

「な！！なんだとっ！？ま、まだだ、まだ俺にはアレイに教えることが山ほどある！！」

「あら？この前、アレイは天才だあー、俺の教えたことをみんな覚えてしまったぞ！！とか言っただけじゃなかったかしら？」

「んん！？そ、そんなこと言っただけかあ？」

「言っただけよ！！誤魔化そうとしてもダメなんだから」

両親の訓練は厳しかったが決して俺の限界を超えたものは求めなかった。

そうして……ゆっくり、少しずつ確実に両親の力は俺に継承されていったのである。

「いや、言っただけね」

「ぜええったい、言っただけ！！」

「おかあさん！！ふざけてないで治療魔法教えてよっ！！」

楽しくて自然と笑みがこぼれる、そんな毎日を俺は両親と送っていた。思えばこの頃が一番楽しかったかもしれない。魔王を倒し数年、人の生活も徐々に向上してきているまさに人々が夢を見始めた時期だったのかもしれない。

第2話 勇者の夢（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
……短いですがね？

第3話 ペンダント（前書き）

『一番星』

辺りが暗くなってきたときにふと空を見上げると、光り輝くものが一つだけ見えることがあるだろう。それが一番星である。日が沈むか沈まないかの絶妙なタイミングでなければ見ることは叶わず、季節、気候などの影響で見える時間も決まっているわけではない。

さて、話は変わるが都会に住んでいる者が一番星を見つけても喜ぶのはまだ早い。よくじっくりと見てみよう。今動かなかっただろうか？それは人工衛星である。

第3話 ペンダント

ぴちぴちと小鳥のさえずる声でアレイは目が覚めた。今日は両親が王宮にお呼ばれするとのこと、家にはアレイ一人であった。もう少し正しく言うのであれば人間はひとりである。家にはエリーヌがアレイのために魔法で作ったメイド人形がいて、すでにアレイの朝食を用意していた。

「もう、おかーさん……僕は一人でもだいじょうぶって言ったのに」

「アレイ様。お食事の用意ができております」

「うん。ありがとう」

アレイは出された朝食を食べ始める。エリーヌが作ったメイド人形だからか、料理の味付けもエリーヌそっくりである。食べなれた母の味付けと全く同じ料理を食べ終わるとアレイはメイド人形に告げる。

「僕今日は、森に遊びに行くから」

「かしこまりました。遅くならないうちにお戻りくださいませ」

「うんっ!! わかった」

アレイの住む村から歩いてすぐ近くに小さな森がある。森と行っても小さな規模の物だが、そこに流れる川で、魚釣りをするのがアレイのひそかな楽しみであったのだ。

アレイは自分で作った竿を持って、雲ひとつない空の広がる家の

外へかけていった。

森の中は、太陽の光を適度にさえぎり、ほのかに暖かい森の中は気持ちの良い風が吹いている。アレイは、さほど時間もかけずに、目的の川へとやってきていた。しかし、川からバシャバシャと水を立てる音がして顔をしかめる。あんなに水を立ててはせつかくの魚がみんな逃げてしまう。一体誰が何を川でやっているのか……

「ああつ、もう！！くそっ」

アレイが木の陰からこっそり川の方へ目を向けると一人の少年が川で何かを探すように、川の石をゴロゴロと転がしている。気がつくアレイはその少年に声をかけていた。

「ねえ、何やってるの？」

「ああ？おまえには関係ないだろうがつ、ああつくそ」

少年はアレイの方を見もせずそう吐き捨てた。アレイはちょっとだけむっとしたのでその少年に言い返してやる。

「関係あるよ。僕はここに釣りに来たんだ。君がそんなに水をはねさせたら魚が寄ってこなくなっちゃうよ」

「……………」

アレイの言葉に少年の手が止まる。相手が静かになったのを見てアレイは早速釣りの準備に取り掛かるが、ふと少年を見ると体が小刻みに震えている。不思議に思って少年の顔を覗き込むと、ポロポ

口と涙を流していた。

「えっ！？ちょ……ちょっと、どうしたの！？何があったの？」

「うつつ……おかさんからっ……もらった……ふぐっ……ペンダントが」

少年の話だと、何でも母親からもらったペンダントを川に落としてしまったのだとか……

「あゝもつつ……何で早く言わないかなあ」

アレイは釣竿を置くと川に入って先程の少年のように川の石をひっくり返したり目を凝らしたりして、ペンダントらしきものを探す。

「ねえ……それってどんなペンダントなの？分らないと探せないんだけど」

「え……あ、赤い宝石のついたのなんだけど」

アレイは釣りをあきらめて少年の宝石探しにとことん付き合うことにした。

しばらく辺りには、二人の子供が立てる水の音だけが響いた。

「あ…あつた!!」

アレイは赤い宝石のついたペンダントを手にとって声を上げる。

「ええ!!ああつ!!ホントだっ!!」

アレイの手にあるペンダントを見て少年はぐいっと目をぬぐうとにつこりと笑う。すでに辺りは夕焼けで美しい赤色に包まれている。

「……ありがとう。本当に」

よほど大事なもののなかギュツとそれを抱きしめてアレイに礼を言ってくる少年。

「ん、どういたしまして。……そんなにそのペンダント大切なものなの?」

アレイは、釣り道具をかたづけながら何とは無しにその少年へと口を開いた。一瞬表情を曇らせた少年だったが、意を決したようにアレイに向き直る。

「このペンダント、お母さんの形見なんだ……あたしがおよめに行くときにつて」

本当にありがとうと、また礼を言ってきた少年にアレイは首を左右に振る。

「そうなんだ。じゃあもう落とさないようにしないとね……そのペ

ンダント」

母の形見であるのだというペンダントを抱きしめながら嬉しそうにしている少年に自然とアレイも口元が緩んだ。……ん？……アレイはふと疑問を抱く。

「あれ？……そのペンダントってお母さんの形見なんだよね？」

「え？うん……そうだけど？」

「……さっきお嫁に行くときって言わなかった？」

「えっ！？……言っただけど」

「お、女の子だったのっ！！」

アレイは驚愕で、大きな声をあげてしまう。アレイの近くにいた川鳥がその声に驚いて飛び去って行くほどに。少年……改め目の前の少女は、アレイの様子にぽかんとしていたが、少しして顔を真っ赤にするとアレイを怒鳴り付けた。

「お、男だと思ったのか！！……あ、あたしは女だっ！！」

「だ……だって、しゃべり方だって男の子みたいだったし……」

目の前の少女はショートヘアーで飾り下のない服に身を包んでいる。今はそうでもないが、先程川でペンダントを探している時のきつい顔つきを見たら、少年に間違えても仕方ないだろう。

「それは……家はおかあさんが早くからいなかったから……」

しゅんと元気をなくす少女にアレイは慌ててかぶりを振る。

「い、いや、僕がちゃんと見てなかったからだよっ！！そ、それよりも君、名前は？」

「え……あたしはレイナ」

「ふうん、僕はアレイっていうんだ。じゃあ、またね！！」

アレイは荷物を持って家へと走って帰る。メイド人形に早く帰るように言われていたのを忘れていた。せめて一番星が出る前に家に着かないと……

「……またね……」

レイナは風のように走り去っていくアレイの後姿を見て小さくつぶやいた。彼女の中でアレイのまたね、という言葉がまた聞こえてきた気がした。

レイナは嬉しそうにペンダントを握りしめるともう見えなくなってしまった少年のことを考えながら帰路に就いた。

第3話 ペンダント（後書き）

お読みいただきありがとうございます。文章力のなさのせいで分かりにくかったかもしれませんが、アレイと魔王が出会った8年前のお話です。（つまり前回からの続き）当時アレイ5歳。そしてアレイが5歳の時から6年前（つまり魔王とアレイが出会う14年前）にアレイの父が魔王を倒したという設定です。

ちなみにアレイと一緒に旅してる魔王はアレイのお父さんが戦った魔王とは別物の魔王ですからねえ。

第4話 英雄の義務（前書き）

『義務』

その立場にある人として当然やらなければならないとされていること。

だがその定義付けは極めてあいまいであり、それを見定めていくのは至難の業だ。義務を負わずに権利だけを求める者、過剰に義務を負わせられる者など多くの差が世界に生まれてしまっている。出来れば前者になりたいが……唯の我がままで自分勝手な者と周囲に思われるだろう。

第4話 英雄の義務

ここは、アレイ達の住むロレッタ王国・国王の王宮。その王宮にジャードとエリー又は呼びつけられていた。何でも、ロレッタ王国の北に位置するスフィンノ帝国と国家間が悪化し今にも戦争へと突入しそうなのだとか。魔王を倒した二人ならば何か名案を思いつくのではないかとのことで今回は呼ばれることになったらしい。

「全く……戦争なんてやらなきゃいい話だろう。わざわざ俺達を呼びつけて何だつてんだ」

国王の元へ向かいながら、ジャードは小さくため息を吐きながらぼそぼそと愚痴をこぼす。エリー又はそんな夫に苦笑いしながら、彼に口を開いた。

「きっと、国同士ともなると大変なのよ。それぞれ厄介事を抱えているわけだし」

「それにしても……わざわざ俺達を呼びつけるっていうのは……」

ジャードが言葉を言い終えないうちに一人の男が、二人を出迎える。黒い服を着た、長身の男は、ジャード達を見ると恭しく頭を下げ、自分を国王に仕える貴族だと紹介する。

「本日は、わざわざご足労下さり、誠に感謝いたします。私、わたくし国王陛下に仕える、レイフォード・エリオスと申します」

「ん、で、今日は何でわざわざ俺らを呼びつけたんだ？」

「？ 事前にお話ししておいたはずですが」

「それ以外にも何か理由があるんだろう？ って聞いてんだよ」

ジャードの言葉に、やっとレイフォードは彼が何が言いたいのかわかったのか口だけでにやりと笑い、落ち着き払った様子でジャードとエリーヌにゆっくりと口を開く。

「これはこれは……やはり、6年前に魔王を倒されたお二方は違いますね」

「はつきり言え。何が目的だ？」

「そう慌てずに。私はお二方にスフィンノ帝国との戦争に参加していただきたいのです」

口元に笑みを浮かべたまま、レイフォードはこともなげにそう言うて見せる。つまり魔王を退治した英雄に今度は戦争に参加してほしいと言っただけだ。

「ふざけるのも大概にしろよ……なぜ俺達がそんなものに参加しなくてはいけないんだ？」

「ふざけるも何も……私は貴方達ロレッタ王国の英雄に当然のことを求めているのでございます」

「当然のこと……ですって？」

それまで口を閉ざしていたエリーヌも不機嫌そうに、目の前の不敵な笑みを浮かべる男へと口を開く。

「ええ、貴方達は英雄として、ロレッタ王国の民を救うと言う義務があります。……それに貴方達はこのロレッタ王国だけではなく、世界的にも有名な御方です。上手くいけば戦わずして、スフィン帝国との戦争にも勝つことができるかもしれません」

「だが……もし戦うことになったら、その時はどうするんだ!？」

「多くの魔物達と戦ってきた貴方達なら簡単なことでございましょう? 所詮相手は人間の兵。お二方の力をもつてすれば、勝つことなど造作もないことだと思いますが?」

目の前の男に激しい嫌悪感をジャードは持った。いやきつとエリ―ヌも持つているのだらう。おそらく兵など戦争の道具としか考えていない彼に取ってみたら、勇者と大魔法使いはとても便利な道具なのだらう。ジャードは笑みを浮かべている男に吐き捨てるように言った。

「お断りだね。俺達はそんな戦争に参加するつもりはないし、国王に起こさせるつもりもない。俺達は今日、国王に助言を求められてやってきたんだ、そんな話をする気はない」

ジャードの言葉にレイフォードは少しだけ残念そうにしながらも、口だけの笑みは崩さずに答える。

「そうでございました。本日来ていただいた理由は、国王陛下に意見を申し上げることでしたね……ではこちらにお越しください」

彼の表情は、まるでジャード達を聞き分けのない子供の様だと思

っているようだ。レイフォードはくりと二人に背を向けると、国王の部屋へと案内するために歩き出した。

そんな彼の態度はまるで、どんなにジャード達があがいてもロレツタ王国がスフィノ帝国と戦争を起こすのは変わらないと言っているようで、ジャードは無意識にギュツと握りこぶしに力を込めた。

第4話 英雄の義務（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

ご意見感想、誤字脱字報告受け付けてますよぉ〜

第5話 国王の思惑（前書き）

『亀と人間』

亀が人間の先を歩いているとき、永遠に人間は亀に追いつくことはできないらしい。これが俗に言う「アルキメデスと亀」の理論だ。人間が亀との距離を詰めている間に、亀は少しだけ進むからその距離を永遠に埋めることは不可能なのだから………納得いかないが、理論上成り立つのだから不思議だ。

第5話 国王の思惑

「国王陛下、失礼いたします」

レイフォードが軽くドアをノックすると、重々しい声で、入れ、と言う短い単語が聞こえてくる。その声にレイフォードはゆっくりと静かにドアを開けた。部屋には美術品の数々が置かれ、大きな椅子に座った国王が笑顔でジャード達を迎える。実は国王とジャードは古い友人であり、若い時はよく一緒に剣の相手をした仲なのだ。ジャードは彼の事をよく知っている、彼は間違っても無益な戦争を起こすような人間ではないことを。

「よく来てくれた……ジャード、そしてエリーヌさんも」

「お久しぶりです。国王陛下」

エリーヌは国王陛下に軽く会釈を返す。しかしそんな和やかな雰囲気も一人の男によって壊されることになった。

「国王陛下、本日御二方には無理を言ってきたいたのです。早急に本日の目的をお伝えくださいませ」

「うっ……分かってる！！お前はまさかこの二人にもそんな態度をとったのではあるまいな！？」

「国王陛下、話がずれております。そして私の態度は誰であろうとも決して変わりはいたしません、さあ、早く本題へと移ってくださいませ」

「う、うるさい！分かつている。お前がいると落ち着いて話もできん。しばらくこの部屋から出ていろっ！！」

国王の言葉に納得いかないと言うような表情を浮かべていたレイフォードだったが、少しして、……かしこまりました……とだけ言うとそのまま静かに部屋を出て行った。

「ふう……奴には困ったものだ」

溜息を吐く国王に、ジャードは自分の疑問をぶつけた。レイフォードとの会話からずっともやもやと心に引っかかっていたものだ。

「おいっ……お前、本当に戦争なんてする気じゃないよな？」

「は？ 戦争をするなんていつ言った？そもそも今回は戦争を回避する案を二人に考えてほしくて呼びつけたと手紙に書いてあっただろっに」

その言葉にジャードはほっと胸をなでおろし、エリーヌも肩の力を抜いて緊張を解く。そんな二人の様子に国王は首をひねった。

「一体何なんだ？どうかしたのか？」

「いや、さっきの……レイフォードだったか？あいつが俺達に戦争に参加してほしいって言うてきてな」

「なんだと！！そんなことを言ったのか！？……うゝむ。まあ、あやつの言うことも分からなくもないのだがな」

「分からなくもないだっ！？ふざけるなっ！！」

「ちよっ！！ジャードっ！！」

怒鳴りながら今にも国王へ殴りかかろうとするジャードを必死でエリーヌは止めた。激昂するジャードに国王の表情も少しだけ曇る。何か国王には国王なりの考えがあるのだろうか……エリーヌは国王がどういった考えを持っているのか聞くべく、未だにさわいでいる自分の夫を魔法で動けないように拘束してから口を開いた。

「おいっ！！エリーヌなぜ邪魔をする」

「ちよつとあなたは黙ってて。……国王陛下、今の発言はどういう意味でしょうか？」

「うむ……今の状況で戦争を起こせば確実に多くの者が死に、そして戦争で勝っても負けてもこの国は疲弊する。しかし……どうやら相手は戦争をやる気満々の様でな、こちらが和平交渉を持ちかけても一向に反応せん。むしろ自分達を油断させるために和平交渉を持ちかけているのだろうと思われ、逆に警戒されてしまっている。レイフォードが言うようにお前たちが戦争に参加すれば、確かにこちら側の戦力は格段に上がり戦争に負けることもなく被害も少ないだろう」

「確かにそうですが……陛下はそれを望んでいるのでしょうか？」

エリーヌの真剣な表情に、国王は静かに、しかしはっきりと二人に聞こえるように言った。

「私は戦争をしたくない」

「そうですか、分かりました。陛下のお言葉を聞いて安心しましたわ。ねっジャード」

エリーヌは国王の言葉につこりほほ笑むと、自分が拘束しているジャードへと目を向けた。ようやく落ち着いたのかジャードも冷静になったようで、もう暴れる気はないようだ。

「さっ、では三人でどうすればいいか考えましょう」

国王の部屋を出てきたレイフォードは一人、王宮の廊下を歩いていた。

……国王陛下はどうか和平交渉を成立させようとしているようですが……

再三、ロレッタ王国が和平交渉を申し込んでもその返事は全く来ずスフィンノ帝国はどんどん戦争に備え軍備を増強している。もはやこれは話し合いで解決できる領域を超えているのは明らかだ。レイフォードは歩いていた足をとめた。

……仮に、勇者達が戦争に参加しなかった場合、我々の軍事力とスフィンノ帝国の軍事力は五分五分。これでは両国に甚大な被害が出るほか、勝てるかどうか分からないですね。そしてもし仮に、勇者が何らかのきっかけで、敵国に渡ってしまったら……確実に我々

は負けることになる。……

「参加されないのであるならば……危険分子は取り除いておいた方が良さそうだ」

レイフォードは、くつりと笑うと止めていた足を進める。廊下には彼の靴音だけが響いていた。

第5話 国王の思惑（後書き）

いやゝいつもながらカスイ文章力ですんません。

第6話 一人の食事（前書き）

『召使い』

雇って家の雑用をさせる者のことである。

下男・下女ともいわれ、雇い主に対しては絶対的な忠誠を誓わなければならない。ただ、召使いは「奴隸」ではないため基本的人権が保障されており、給金もちろん存在する。

第6話 一人の食事

「アレイ様。こんなに遅くまで一体どちらへ？」

「いやちよつと……」

アレイが家に着くと、無表情で家の前に立っていたメイド人形。どうやらアレイの帰りが遅いので、家の前に立ってアレイの帰りを待っていた様子。辺りは、すでに暗くなり、民家には明かりがもっている。

「アレイ様……私は早くお帰りになるように申し上げたはずですが？」

「……ごめんなさい」

詰め寄るメイド人形の視線が痛い。

「アレイ様、本日旦那さまと奥様はお帰りにならないようです」

「え！？ ど……どうして？」

まさか、あの両親に限って厄介事に巻き込まれたりはしないはずだが……

アレイが不安そうな顔をしているのに気がついたのか、メイド人形は遅くなる理由をアレイへと説明する。

「旦那さまと奥様は本日宮殿でお泊りになるようです、お帰りになるのは明日になるかと」

「あ……そうなんだ」

「はい、ですからご安心を。さあ、アレイ様。風邪をお引きにならないように、お部屋に」

メイド人形は抑揚のない声そう言うと、アレイの手をとって家の中へと入る。彼女の手は随分と冷たくて、アレイにまるで体温を感じさせなかった。

「ねえ、どのくらい外で待ってたの？」

「私でございますか？………そうですね、私がこの家の仕事を片付けたのが、正午過ぎでございますから、それからずっとですね」

つまり、このメイド人形はずっと自分の帰りを待って家の前に突っ立っていたらしい……。

「た……大変だった？」

「いえ、私は特に何も感じませんでした。……しかしアレイ様、昼食はどうなされたのですか？正午には帰ってくるものと思いましたが」

そこでアレイは自分がようやく何も口にしていないことに気がついた。ペンダント探しにあまりに夢中になっていたものだから、昼食のことなど頭の中からすっかり追い出されていたわけだ。それを感じ出したら、なんだか急激にお腹が空腹を訴えてくる。

「ではアレイ様、まずその濡れたお召しものを新しい物に着替えて

ください。そのあとお食事に致しましょう」

アレイはこくりと頷くと自分の部屋へと向かう。その途中に、良においがアレイの鼻をかすめた。すでに夕食の準備はできているだろう。

「うわぁ！！ 今日豪勢だね」

なぜか今日はいつもよりも豪華な料理がテーブルの上に並べられ、アレイは目を輝かせる。

「ええ、本日はアレイ様をお一人になさってしまうことに旦那様と奥様は心を痛めていらっしやいました。ですから代わりにアレイ様の料理を豪勢にしてほしいと奥様が言われましたので……」

「へえ……そうなんだ」

相槌もそこそこにアレイは、料理を食べ始める。一食分抜いただけなのにこんなに空腹なのはきつと必死に川で動き回ったからだろう。暖かい料理は、川の水で冷えていたアレイの体をじんわりと温める。

「おいしいっ!!」

「そうですか。それは良かったですね」

アレイの食事の様子を、メイド人形は側に立って見ている。しばらくアレイは食べることに夢中だったが、ふと……直立不動のメイド人形を見やる。

「ねえ、お腹すかないの？　立ってないで座ればいいのに」

メイド人形は感情の見られない瞳でアレイを見つめると首を振る。

「アレイ様、どうぞお気になさらずに。……何かお飲物をお持ちしましょうか？」

「いや、いいよ。……ありがとう」

アレイは今日会ったばかりのメイド人形に礼を言くと、また食事をとり始めた。思えば、これが初めてアレイが一人で食事をとった日かもしれない。それまでは必ず両親と食事をとっていたアレイには、ひどくその日の食事は静かに感じられた。

そんな静けさに、アレイはたまらずそばに控えるメイド人形に声をかけてしまう。

「ねえ、本当にお腹すかないの？」

「私は奥様によって生み出された魔法人形ですから疲れませんしお腹もすきません」

「でもさあ……」

目の前の魔法人形は的確にアレイの聞いた内容にだけ答えるため、なかなか会話が続かない。そんなメイド人形の言葉にアレイは突き放されている感覚を覚え、一人のさみしさを紛らわせようと話したはずが余計さみしい気分になってしまった。

「ご安心ください、アレイ様」

食事の手を止めてうつむいていたアレイは予想外に近くからメイド人形の声が聞こえてきたことに、驚いて顔を上げる。先程まで少し離れた所に立っていたはずのメイド人形はアレイのすぐそばにまで来て彼のことを覗きこんでいた。

驚きで開いた口がふさがらないアレイをメイド人形は優しくなでる。その手は冷たくて人の持つようなぬくもりは無かったが、なぜだかアレイの心は温かくなった気がした。

「明日になれば、お父様とお母様も帰っていらっしやいますから」

抑揚のない声だがアレイを気づかっているのためか、やわらかなしゃべり方のメイド人形の言葉にアレイは小さくうなずいた。

第6話 一人の食事（後書き）

話し進まねえ――――

第7話 暇な一日（前書き）

『ジャム』

果物の肉に砂糖を加えて煮詰めて作ることができる食品。

果実や果汁に含まれるペクチンに砂糖と酢が作用してゼリー状にやわらかく固まる作用を利用している。完成した時、比較的果実の原型が保たれている物がプレザーブ、オレンジやレモンといった柑橘類を原料とし果実が含まれている物をマーマレイドと言う。

非常に甘いためそのまま食べることは少なく、パンやクラッカーなどに塗って食べるのが一般的である。

第7話 暇な一日

「アレイ様、おはようございます」

寝ているアレイの部屋のドアを勢いよく開けて入ってきたのは、エリーヌが魔法で作ったメイド人形だった。完全なる無表情で、全く感情が読めないのだがなぜかアレイには彼女がなんとなく焦っているように見えた。

「ど……どうしたのいきなり？」

アレイは体を起こすと一気に覚めた目でメイド人形を見やる。

「申し訳ありません。たった今奥様から連絡があつたのですが、本日も帰れそうにないとのことであります」

「ええっ!？」

一体宮廷で何をしているのか非常に気なるアレイだったが、寝癖のついた頭を少しだけ掻いて、ゆっくりと布団から出た。

「あと奥様がアレイ様に困ったことがあつたら、危ないから自分でやらないでメイド人形に頼むようにとおっしゃっておいででした」

「……心配しすぎじゃないかなあ……はあ、っていうか、おかーさんとうとうやって連絡とってるのさ」

「私でございますか？ 私は奥様に作られた魔法人形ですから奥様の思念が自由に伝わってくるのでございます」

「へえ……じゃあ、今おかしさんが何を考えているのか分かるの？」

アレイの言葉に耳を傾けながらメイド人形はテキパキとアレイの部屋を片付けている。

「……すみませんアレイ様。奥様の思念は奥様から送られてきたときにしか分からないのです。奥様の方はいつでも私の行動を把握できているのですが……」

まあ、それはそうだろう。使う人間は自分の人形の状況を把握していなければならぬが使われる人形が自分の主の状況を常に把握している必要などないのだ。主からの命令があつた時だけそれを確実にこなせばいいのだ。

「アレイ様、朝食のご用意ができておりますので、着替えが終わりましたらどうぞ」

メイド人形はアレイの使っている毛布と、昨日脱ぎっぱなしだった服をかついで部屋から出ていく。窓の外を見るとまぶしいほどに太陽が輝いていた。きっとメイド人形はこの洗濯日和を逃すまいとしているのだろう。

「ん……今日は何しようかなあ」

食事を済ませたアレイが朝に自分の脱いだ服ををメイド人形の所へ持っていくとせつせと洗濯物を干しているメイド人形を見つけた。

「あ、ねえ……これどうすればいいかな」

「アレイ様……わざわざこのようなお気使いをなさなくても」

「いいんだよ。今日は特にやりたいこともないし……この水で洗えばいいの？」

アレイはすぐそばにバケツに汲まれた水を指差してメイド人形に尋ねる。メイド人形は複雑そうな　　と言っても表情に変化はないのだが　　様子でアレイに口を開いた。

「お待ちください。その水は何回か使ってしまったのでアレイ様のお手を付けるにはふさわしくありません。私が新しい水を汲んできますのでそれまではお待ちを……………っ……………アレイ様、何をしているのですか!？」

メイド人形の言葉もそこにアレイは勢いよくそのバケツに入った水に自分の服を手ごと入れた。

「だって、この水まだそんなに汚くないよ？」

「そういうことを私は言っているではありませんが……………」

メイド人形はアレイにゆっくりと近づくと、しゅしゅながら服の洗い方をアレイに教えてくれた。こういうことはあまり教えてもらったことのないアレイにとって新鮮で面白い事であったのは間違いない。

「……そういえばさあ」

洗濯物がひと段落ついたところでアレイはふとした疑問を口にする。

「なまえは？ あるんでしょ」

メイド人形はピタリと仕事の手を休めると、アレイに向き直る。真正面から無表情に見つめられるというのはなんだか緊張感が半端ではない。

「私の名前……でございますか、……そうですね、奥様は私を急ごしらえて作ったようですので即席メイドともお呼びくださいませ」

「そ…そくせき!？」

「お気に召しませんでしたか？」

「いや……だって、それなまえじゃないよね？」

「そうですか……お気に召しませんか。では、欠陥人形、もしくは雌奴隷なんていうのはどうでしょうか？」

「ちょ、ちよつと……まってよ。どれもこれも変だよ。なまえがないなら、ないって言っただけだよ。」

メイド人形は訳が分からないと言いたげな様子だ。そもそも自分に名前など必要ないと思っっているのかもしれない。アレイはそんなメイド人形に向かって宣言してやった。

「なまえがないなら僕が付ける!!」

「アレイ様、別に私には名前など必要ないのですが……」

「……うるさいな、少し静かにしててよ」

「失礼いたしました」

アレイは自分の持つ書物を開いて唸り声をあげていた。メイド人形の名前を書物にある物語の登場人物の名前から拝借しようと考えたのだ。しかし、いかんせんこれと言ってしっくりくるものがない。

「うん……」

「アレイ様、昼食の準備ができましたが？」

「いまはいらない」

「……そうでございますか」

アレイはメイド人形の言葉に適当に返事をするだけで、本から目を離そうとしない。しばらくはメイド人形もアレイのそばに控えていたが、あまりにも長いので自分の仕事を済ませるために今はアレイのそばを離れていた。

そうして、メイド人形が洗濯物を取りこみ、それをたたんで整理し、薄暗くなってきたので部屋に明かりをともし、夕食の準備に取り掛かり、良い香りを漂わせる料理をテーブルに並べてもアレイの目は本から離れなかった。

「アレイ様、お夕食のお時間でございますが……」

返事はない。メイド人形はゆっくりとアレイに近づくと素早く彼の読んでいる本を奪い取った。

「あっ！！なにするんだよ」

「いい加減にしてください、アレイ様。旦那様と奥様に言い付けてしまいますよ？」

「……うっ」

「さあ、続きはお食事の後になさったらどうですか？」

アレイはテーブルに並べられた料理に目を向ける。アレイのお腹は小さく空腹を訴えた。

「うん……わかった」

さすがに空腹には勝てなかったのか、アレイはテーブルへと向かう。

焼き立てのパンに、暖かそうなシチューが何ともおいしそうだ。

「アレイ様、パンにジャムはお塗りになれますか？」

「うん、お願い」

メイド人形は無駄のない動きで、ジャムの入った瓶のふたを開けると、パンの上にそれを乗せる。アレイはその様子を見ながらふと、ジャムの瓶に視線を持って行った。

そして……

「あああああああつ!!」

「ど、どうなさいました？」

突然のアレイの叫びにメイド人形もパンにジャムを塗るのを止めてアレイを見つめる。当のアレイはジャム瓶を持つとメイド人形にズイッとそれを差し出した。

「きまつたっ!!」

「はあ……一体何がですか？」

「これ見てっ!!」

メイド人形はアレイの持つジャム瓶を見やる。何年か前に街に来た商人からエリーヌが買い取った物だ。何でも腕のいい職人が作った物なんだとか。

「このジャムがどうかいたしましたか？」

「ジャムじゃなくて見てほしいのはこっち!!」

アレイは指で、瓶のラベルを指差す。そこにはしゃれたデザインの文字で商品の名前が記されていた。

「アネット!! 今日から君のなまえはアネットだからね」

「……アネット」

「うん、よろしくね、アネット!!」

第7話 暇な一日（後書き）

メイド人形の名前、読者の方から提案があつたものを使わせていただきます。ありがとうございます！！

意外とこれからも名前が思いつかないキャラとかが出てくるかもしれないのでその時は、「俺が考えてやってもいいぜえ」という寛大な方がいたらぜひ、御気軽に感想のところに書いてやってください。> (——) <

第8話 特別な子（前書き）

『釣り』

釣竿、釣り糸、釣り針などの道具を用いて魚介類などの生物を採捕する行為、方法のことである。

釣りの主な対象は、海・川・湖沼・池などの水圏に住む魚類である。この場合、釣りは魚の一種として、陸上生物を捕獲する猟と区別される。そして単に釣りと言えば魚釣りのことを指す場合が多い。釣りをを行う場所によって区別して、海釣り、川釣り、磯釣りなどの呼称もある。

第8話 特別な子

「……た、ただいまあ」

疲れた顔をしてエリーヌとジャードが帰ってくる。エリーヌはまだしも、ジャードの方は目の焦点が合ってなくてただひたすら無言だ。

「お帰りなさいませ、奥様、旦那様」

「だ、だいじょうぶ!? 一体どうしたっていうの?」

人形のせいではなのかは知らないが無表情のアネットとは対照的に両親の変わり果てた姿にうろたえるアレイ。

「うつっ……もう駄目っ。……眠い」

エリーヌはそう言うなり勢い良く倒れてしまう。ジャードはふらふらしながらも自室に向かっていった。どうやら二人とも睡眠不足の様である。

「……………僕、今日は釣りにいつてくるね」

「かしこまりました、旦那様と奥様がお目覚めになりましたら私から伝えておきましょう」

アレイはすやすやと床で気持ちよさそうに寝る自分の母親を呆れた目で見ながら、溜息を吐いた。

「あれ？」

釣り道具を持ってアレイが川にやってくると見知った顔を見つけた。彼女はアレイに気がつくと目を見開いて、じっとこちらを見つめてくる。そんな彼女にアレイは声をかけた。

「やあ、レイナ。今日はどうしたの？」

「あつ……ああ、まつまたあつたな。べつ別に私はこの川でお前を待ってたわけじゃないんだ……何となく川に行きたいな　って思ってた……昨日も来ていたわけじゃないんだぞ」

彼女は特に川で何かをしていたわけでもなく一人、たたずんでいた。アレイの問いかけにあたふたとしながら答えるレイナが何だか面白くてアレイは小さく笑った。それを見てレイナはむっと頬を膨らませる。

「……何がおかしい」

「いや、レイナってよく表情がころころ変わるなあって思ってたさ」

アレイは適当な場所を見つけて座ると釣竿を出す。アレイの答えが気に入らなかったのか、レイナはむっとした表情のままアレイのすぐ隣に腰かけた。

「……どうしたのレイナ？　僕なんかのそばにいてもおもしろくないよ？」

「そういうことはあたしがきめることでおまえがきめることじゃない」

そっかと小さく返せばそうだと言われてアレイはまた小さく笑った。こうやって家族以外のそれも同年代の子供と話すのはアレイにとって初めてのことであった。アレイは生まれてからずっと友達と言うものを持ったことがない。いや周囲がそれを持つことを許さなかったと言った方が良かったらうか。アレイの両親は魔王討伐を成功させた伝説の勇者と魔法使いである。ジャードとエリー又は極力、普通の生活を送ろうとしていたようだが周囲からは勇者様、魔法使い様と崇められもはや二人は国王に次ぐ有名人となっていた。そんな二人が普通の一般国民の様な生活を送れるわけがない。もちろんその二人の間にできた子供もまた然りである。

「こらっ！　あんたはっアレイ君に、けがさせたらどうする気だいっ！　……ごめんねえアレイ君……うちの子にはきつく言っておくからねえ」

「アレイ君！　君はこんなところで遊んでたらだめだろう、勇者になるんだから」

「あれい君はぼくたちとあそんじゃいけないんだってママがいったよ」

「そうだよ、あれいくんは、けがしたらたいへんだもん」

「だから僕たちアレイくんとは、遊ばないんだ」

大人達はアレイを特別な子といつも言っていた。大人達の影響が、次第に子供達もアレイを特別扱いするようになって、街中の者がアレイを大切に扱った。ただ……それゆえにアレイは街の皆との間を隔絶された。彼と村人の間には絶対に埋められない溝が生まれたのである。アレイは孤独だった。

『アレイ君はずるいよね、みんなから特別扱いされてさ』

「そういえばさ、レイナはいつもなにしてるの？」

ピクリとも動かない釣り糸を眺めながらアレイは隣に座る少女に口を開いた。レイナは少しだけ考えるそぶりを見せて、ゆっくりとアレイに答える。

「そう……だな、おとうさんのお仕事のでつだいかな……」

「へえ……他には？」

「他に？」

「そうだよ……例えば友達と遊んだりとか、街に買い物に行くとか……」

アレイは少しだけ竿をゆすつたり傾けたりしながら言葉を続ける。

レイナは少しだけ間を開けた後にアレイの言葉に答えた。

「他にはなにも……………友達いないし……………」

「そっか……………」

小さくアレイは答えると、水に垂らしていた釣竿の糸を手繰り寄せ、静かに釣り道具を片付け始める。

「どうしたの？」

「レイナ……………今はひまなの？」

「え？」

「一緒に街に行かない？」

第8話 特別な子（後書き）

過去編どつやって終わらせようか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5970z/>

復活魔王と新勇者

2011年12月29日22時50分発行